

知覚動詞のアスペクトと意味拡張

— 自他対応と主観性 —

高嶋 由布子

京都大学大学院/日本学術振興会

yufuko.t@gmail.com

1. はじめに

日本語の知覚動詞には、他動詞と自動詞がある。このとき、感覚モダリティごとに検討し直すと、(1,2) に示すように「見る・聞く」と「見える・聞こえる」は他動詞形と自動詞形の対応関係がある。しかし、(3) のように嗅覚の「嗅ぐ」は「嗅げる」という自動詞形を持たない¹⁾。これはなぜだろうか。

- (1) a. 太郎は富士山を見た / b. (太郎には) 富士山が見えた
(2) a. 太郎はその音を聞いた / b. (太郎には) その音が聞こえた
(3) a. 太郎はばらを嗅いだ / b.* (太郎には) ばらが嗅げた
c. ばらが {匂う/香る}

本稿ではこの対応関係について観察を進める。日本語の知覚動詞には他動詞と自動詞があり、視覚や聴覚、嗅覚などの感覚モダリティによって、その存在とふるまいに差異があることを指摘する。また、これらが複数の語義を持つことに注目し、それぞれの動詞の中心的な意味だけでなく、多義を整理し構造化し、それぞれの語義での対応があるか分析する。このことから、知覚の言語表現に主観性と身体性が反映されていることを示すことが本稿の目的である。感覚モダリティごとに異同があること、すなわち目や鼻など知覚器官の解剖学的な相違や、光やにおいなど情報のありかたのヴァリエーションに着目し、これらがどのように言語表現に反映しているか考察する。たとえば、目で知覚できるのは身体の前側にあるもので、眼球や首や身体全体の向きを動かすことで、自分で刺激対象を選びとる行動を伴うのに対し、耳は前後左右上下どこからの刺激も受容することが出来る一方で刺激を選択するのは難しく、「注意をむける」のは専ら意識の問題になる。また、聴覚と嗅覚は「音源」「匂いの出どころ」からの「刺激」をとらえるが、視覚では「光の出どころ」と「刺激」を分けて捉えることはないなどの特徴がある。

知覚は、他者と共有できる客観的な外界の情報に関するものでありながら、感情や思考のように知覚している主体にしかわからない心理的・主観的な側面ももっている。ゆえに知覚動詞の表す意味は、客観的世界である外界と心の内側の主観的認識という両方の側面

を同時に持つと考えられる。このような意味で、認知言語学の重要な軸の一つである「言語の主観的な意味へ身体性が反映している」という考え方にとって重要な観察対象であるといえよう。

また、日本語の文法研究において自他対応はアスペクトとヴォイスの問題として扱われてきたが、これまで知覚の動詞は少々特殊なものとされ、この観点からは一般化の対象から外され、あまり詳しくは扱われてこなかった。知覚動詞の自他対応は、視点と主観性が問題となる。ゆえに Langacker の認知文法論における視点を考慮したステージ・モデルの枠組みから分析を試みる。

ここではアスペクトと主観性が知覚動詞の自他対応関係の分析に必要な観点であるとし、多義構造をこの二つの軸から整理する。このことから知覚の他動詞と自動詞が、主観性と身体性をどのように反映しているのかについて考察を進める。

なおここでは、五感（五官）とひと括りにされることが多いが、直接対象に触れる近感覚である触覚と味覚は扱わず、遠感覚である視覚・聴覚・嗅覚について扱う²。

本稿の構成は、以下のようである。第 2 節で知覚動詞に関する先行研究を概観しながら知覚動詞の特徴をまとめ、問題点を指摘する。主に日本語についてどのように記述してこられたか、認知言語学の枠組みのもとでは何が指摘されてきたかについて扱う。第 3 節では動詞の自他対応に関する言説についてアスペクトを中心にまとめる。第 4 節では Langacker の視点に関する理論的枠組みを導入し、これをもとに第 5 節で動詞の複数の語義と自他の対応について分析を進める。その上で動詞の多義構造を第 6 節に示し、感覚モダリティごとの相違点と知覚動詞に共通する特徴についてまとめ、考察を述べる。

2. 知覚動詞の意味的特徴

2.1 知覚動詞の特徴

寺村 (1982: 174) は、人間の身体の動きに、非意思的なもの（落ちる、目が覚める、年を取る）と意思的なもの（降りる、食べる、歩く）があり、この意思的な活動の中でも、肉体的動作・外的活動（食べる、歩く）と、頭脳・心などの内的活動（思う、恐れる）の別があることを指摘する。このとき、五官の発動（見る、聞く）が外的活動と内的活動の中間にあること、さらに知覚作用に能動的なもの、受動的自発的なものがあることを指摘している。前者に「見る、聞く、嗅ぐ、におう、感じとる」、後者に「見える、聞こえる、匂いがする、感じがする、気付く」を挙げている。

また、感覚モダリティをトップダウン的に与えて整理した、知覚動詞の語彙構造についての考察に、小出 (2006) がある。自他対応に関しては、「同じ情報を獲得するにしても、『見る』『聞く』に比べて、『見える』『聞こえる』は知覚の成立が偶発的で、意図性が弱く、受動的といえる側面を持っている」という。これを意志性だけの問題ではなく、次の (4) のように他動詞形の前者「見る」「聞く」「かぐ」は情報獲得を意味しない場合がある³ことを指摘している。

- (4) a. 目を凝らしてよく見たのだが、何も見えなかった
 b. 耳を澄ましてよく聞いたのだが、何も聞こえなかった
 c. 鼻を近づけて匂いをかいだが、何も匂いがしなかった (小出 2006: 4)

小出は、「日本語において知覚過程の2つのステップを区別し語彙的に区別している」という考え方を提案する。これは寺村(1982)の「能動的・受動的自発的」の別よりも強い説であり、前者はその1つのステップである「知覚情報獲得のための行為そのもの」を表し、結果として情報が得られることを「語用論的含意」であるとしている。後者の「聞こえる」「見える」「匂いがする」がもう1つのステップである「知覚の成立局面」を示し、「情報の受容的な側面に焦点が当てられていて、どのように知覚が成立したかについては言及していないものとする。

これらの先行研究では、「見える」「聞こえる」は、他動詞「見る」「聞く」の語尾が変化した自動詞形であるのに、同じ遠感覚でも「嗅ぐ」にはそれがないことがなぜなのかについてふれられてはいない。また、これらが知覚を表すだけでない意味の広がりを持つことなどに関しても言及はない。これに対し本稿の第5節では、動詞の意味の広がりとは他対応について、感覚モダリティ間の類似点と相違点を観察する。

2.2 認知言語学における知覚動詞分析：知覚者の役割の解釈をめぐって

2.2.1 知覚者の格役割の意味的二面性

格文法理論では、知覚の表現における知覚者は、意味的には経験者格をとり、対象は影響を受けない絶対格となるとされてきた。

Lakoff (1993) は、以下のような知覚の文の観察から、知覚者の格役割は二面性を持つことを指摘している。まず、(5) (7) のように from 句が知覚者の位置を示すとき、知覚者は知覚行為の起点となり、情報をつかみとるメタファー的動作主の意味役割を担っているとされる。一方で (6a,c) (8) 知覚刺激の場所を from でとるとき、知覚対象から知覚者への刺激のメタファー的な移動があり、知覚者は対象物からの情報を受け取る役割を担い、着点あるいは被動作主的な意味を持っているということを指摘している。

- (5) From my office, I can see the bay.
 (6) a. The view blew me away.
 b. *From my office, the view blew me away.
 c. The view from my office blew me away.
 (7) From my office, I can hear the trains.
 (8) The noise came through the walls. (ibid.)

このように、知覚行為は、知覚者から知覚対象への行為、知覚対象から知覚者への移動と

いう二つの方向どちらでも表現されるが、これが同時に言語化されることはなく、一文中では一貫して一方の方向のみをとるため、(6b) のような文は容認されない。

谷口 (2005) は、知覚の方向が一方しかない感覚モダリティと双方向あるものを区別し、それぞれ一方向性知覚、二方向性知覚と呼んでいる。

- (9) a. I smelled the garlic. (Experiencer-based)
 b. The garlic smells good. (Stimulus-based) (谷口 2005: 217)

(9) のように嗅覚の表現は知覚者と刺激どちらも主語にとることができ、知覚者すなわち経験者からの対象へのメンタル・コンタクト⁴と対象から知覚者へのメンタル・コンタクトどちらもが許容される。

- (10) a. The {smell/sound} reached me.
 b. ??? The {sight/taste/feeling} reached me. (ibid.: 219)

これは、(10a) のように嗅覚と聴覚で成り立ち、(10b) に挙げるほかの感覚モダリティでは成り立たない。これをまとめると (11) のようになり、これを図 1 に図示する。

- (11) a. 一方向性知覚：視覚、味覚、触覚
 ・経験者から対象へのメンタル・コンタクト
 b. 二方向性知覚：嗅覚、聴覚
 ・経験者から対象へのメンタル・コンタクト
 ・対象から経験者への刺激発散 (匂い、音) (ibid.)

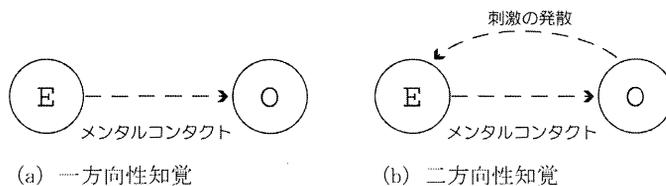


図 1 谷口 (2005: 219)

問題点を指摘するならば、この二分法は、対象が、空間的な物体であることを前提にしているという点が挙げられる。つまり、視覚と触覚によって捉えられる延長を持つ物体を「対象」としているのである。対象が、「音」や「匂い」という刺激自体なのか、それとも音を発するスピーカーや人、あるいは匂いの源になる花やゴミであるのかを区別して考える必要がある。二方向性知覚で「匂いがする」「音がする」は、刺激の発散と捉えられるが、遠感覚である視覚では、「刺激」である「光」を捉えたとき「光っている」という表現を刺

激の発散と捉えるべきだろう⁵。このような意味で、この二分法は、十分なものとは言えないし、「見る、聞く」と「嗅ぐ」の違いを表してはいない。

また、日本語の知覚の自動詞の性質を考える際、さらなる枠組みを用意する必要があるだろう。というのも、「見える、聞こえる」といった自動詞は、対象から知覚者への移動になぞらえられる志向性を持っているかという点必ずしもそうではないからである。

- (12) a. ここから富士山が {見える/*見えてくる}
 b. 遠くから笛の音が {聞こえる/聞こえてくる}

たとえば(12a)ではカラ格が何の起点かという点、それは知覚者の起点であり、知覚対象である「富士山」の起点ではない。一方で(12b)では音の起点がカラ格で示されている。このように場所格に関しては「見える」と「聞こえる」で別の振る舞いをする。ゆえに、自動詞が対象から知覚者への「移動」のようなものを示すという主張は、「聞こえる」ならばそれに当てはまるが、「見える」は当てはまらないため、知覚の自動詞一般の性質とはいえないことが指摘できる。

2.2.2 意味的二面性を基盤にした他動詞の意味拡張と知覚者の意図性

高嶋(2007, 2008a, 2008c)では知覚者の能動的な動作主的側面と受動的な刺激の着点としての役割を持つという二面性から「見る・聞く」の意味拡張を説明した。これは他動詞だけの検討で、空間内の関係の面ではなく意味拡張について次のような例を挙げて説明した。

- (13) a. 太郎が窓の外を { ϕ /ぼんやり} 見ている <目を向けている+視知覚>
 b. 喫茶店から {じっくり/偶然} 撮影現場を見た <{意図的/偶発的} 視知覚>
 c. CD を聞く <CD をかけるなどの意図的の行為を含意>
 d. 爆発音を聞いたとき、僕は裏庭にいた <偶発的知覚>
- (14) a. 書類を {じっくり/?ぼんやり} 見て結論を出した <(視知覚) +概念的検討>
 b. {嗅いで/やって/聞いて/解いて} みる
 c. わからないところを先生にきく <質問する>
- (15) a. その学生は (ぼんやりしていたせい) {痛い目/憂き目/泣き/地獄} をみた
 b. 事件が解決をみる

知覚の意図性の有無どちらも許容することをまず(13)で示す。この意図的な知覚行為の意味を含んでいることが(14)の概念的な情報の検討や情報を得るための行為へ拡張する基盤となる。一方で偶発的な情報の知覚があることが(15)の〈経験する〉といった意図性のないイベント、望んでやったことでないことへの拡張の動機付けになっていると考えられる。意図性のない知覚、すなわち情報を得ようとする能動的行為というステップを伴

わず、能動的行為を伴わない情報の受容だけを表すことがあるため、〈経験する〉の意味へ拡張することができるといえよう。このため意味拡張の観点から鑑みると、他動詞が一概に「能動的」知覚だけを表しているわけではないといえる。小出（2006）で二つのステップを語彙的に区別しているという主張があったが、他動詞でも修飾語をかえることでどちらのステップも表せることや、身体的特徴から「聞く」にはほとんどそのステップがないこと（音が聞こえないと音を聞くことができない）から、他動詞と自動詞には別の違いがあると分析していくほうが現実に即していると考えられる。

しかし、高嶋（2008a）は意味的特徴からの考察でしかなく、文法上の特徴、意思性やアスペクトといった観点からの分析がさらに必要である。このため、第3節と第4節ではこの他動詞と自動詞の関係と自発態についてそれぞれまとめ、分析の枠組みを導入する。

3. アスペクトと自他対応

他動詞が、対応する自動詞を持つかどうかに関する研究は古くからあるが、早津（1989）は対応する自動詞を持つ他動詞（「倒す（倒れる）」「曲げる（曲がる）」など）を有対他動詞、そうでないもの（「叩く」「読む」など）を無対他動詞と呼び、「有対他動詞には、働きかけの結果の状態に注目する動詞が多く、無対他動詞には働きかけの過程の様態に注目する動詞が多い」という特徴があることを述べている。有対他動詞は「割る、温める、移す、決める」など対象の変化を含意するものが多いという。一方で対象の変化を引き起こさない「考える、認める、調べる、嗅ぐ」のような思考・判断・探求・知覚などを表す動詞は無対他動詞になっている傾向があるという。

- (16) a. 切っても切れない縁
 b. 電話をかけたがかからなかった (早津 1989: 238)
- (17) a. {ひも/縁} を切った / a'. {ひも/縁} が切れた
 b. 電話をかけた / b'. 電話がかかった

(16) でみるように、有対他動詞が対応する自動詞とともに用いられるとき、結果をキャンセルすることができ、他動詞には行為の過程の意味だけが解釈される。しかし (17a,b) のように、他動詞が過去を示すタ形である場合、たいてい (17a',b') は含意されていると解釈できる。

これをアスペクトの観点から考えると、有対他動詞は継続相と完了相をどちらも持っている、自動詞は完了相での意味と対応しているといえることができる。自動詞は項の数一つ減り、ヲ格をとる行為の対象が存在しなくなることから、他動詞で示される継続相の活動動詞の意味は持たない。有対他動詞には継続相の働きかけの様態が示されない動詞が多いが、(16) のように対応する自動詞で完了相での意味のみを否定することによって、継続相だけの意味が解釈される。

実際のところ、本稿の中心である「見る、聞く」は早津(1989)や佐藤(2000)では例外であるとして、有対他動詞(佐藤の用語では相対他動詞)として扱っていない。しかし、自他対応派生は、言語の歴史的变化による過程を経てきているため、一概に規則的だと主張はできない。むしろプロトタイプ・カテゴリーをなしていると考え、知覚の他動詞「見る、聞く」と自動詞「見える、聞こえる」の対応関係もまた、これらの有対他動詞とある一定の特徴を共有していると考えるのが妥当であろう。ゆえに(4)でみた「見たけど見えなかった」などの文は以上で述べたアスペクトの観点から解決できるといってよい。

ちなみに佐藤(2000)は自動詞文と他動詞文の主語を担う名詞句が異なることを相対他動詞の条件としている(*ibid.*:37)。しかし、「見る/見える」は(19)のような敬語語尾の一致のテストで、一致してしまうことにより例外として分析から省かれている。

- (18) a. 殿下に雅子様が見える / b. 殿下が雅子様を見る (*ibid.*)
 (19) a. 殿下に雅子様がお見えになる / b. 殿下が雅子様をご覧になる (*ibid.*)

確かに知覚の自動詞では知覚者が背景に読み込まれ、主語的役割を担っていると考えられることもできるが、次の(20)のような文では、知覚者は文にとって必須の要素ではないため、(19)で主語の役割を担う名詞句が一致しているといつても主張できるわけではない。

- (20) 天気の良い日は筑波山の山頂から富士山が見える

このように、知覚の自動詞では知覚者の存在をほとんど含意しない表現もとられることから、次節では自他対応だけでなく、自発態に関する考察を踏まえ、知覚者の存在とその認知文法的モデル化についてまとめる。

4. 自他対応とステージ・モデル

4.1 自発態と自他対応

寺村(1982)では他動詞と自動詞の関係については、自発態への言及のなかで取り上げている。

- (21) a. 昨日の火事で家が十軒焼けた
 b. ガラスが割れる(音がする) (寺村1982:271)
- (22) a. [誰かが] 家を焼く
 b. [誰かが] ガラスを割る (*ibid.*)
- (23) a. Xガ V(他動) -e - (ru)
 b. Yガ Xヲ V(他動) - (ru) (*ibid.*)

寺村によれば、自発について一般化すると、(21) と (22) の対応関係のように (23) のような規則的な対応がある構文の意味は、「あるもの (X) が、自然に、ひとりでにある状態を帯びる、あるいはある X を対象とする現象が自然に起きる」(*ibid.*) ということだという。

(23a) は (23b) での V の動作主 Y が姿を見せず、「家が焼けたりガラスが割れたりするのは、何らかの原因があり、その中には何らかの外力が加わってそうなった、ということもあるであろうが、自発表現は、V-の主体を不問に付した、あるいはそれが意識に損しない、というところにその本質がある」(*ibid.*) と述べる。

「見える、聞こえる」は他の自他対応のある動詞がほとんど五段活用のものであるのに対し、形態的に特異であるうえ、さらに受動態と自発態の差が微妙であることが次のような例から指摘される。

- (24) a. ここへ来るところを誰かに {見られ/?見え} なかったか?
 b. 困惑した様子が {見られた/見えた}
 c. 彼女は若く {見られる/見える}
 d. 北の方に筑波山が {見られる/見える} (*ibid.*)
- (25) a. 立ち話が彼らに {聞かれた/聞こえた} らしい
 b. 立ち話が誰かに {聞かれ/?聞こえ} なかったか?
 c. 遠くに波の音が {?聞かれる/聞こえる} (*ibid.*)

これについて「述語が受身形の時は動作の主体の『意識的、主体的な認知、認識』を表すのに対し、自発形の時は『無意識的な知覚』『自然に視覚、聴覚に生じた印象』を表しているようである」(*ibid.*) という。自然現象 (24d) (25c) のときは自発態が容認され、知覚者の意識的な知覚のときは自発ではなく受身形が使われるということである。

このように、自発態について考えるとき、参加者の関わり方の度合いが問題となってくる。次節では叙述のスコープという考え方を導入する。

4.2 叙述のスコープと自動詞・他動詞

自動詞と他動詞の違いは、言語表現内に現れる動詞の項 (参加者) の数の違いである。しかし、寺村の観察を認知文法的に検討するならば、表現内に直接示される項だけでなく、参加者が背景にどの程度解釈されるかがこれら態をあらわす形態素 (-ru/-eru) に示されているとすることができる。つまり、態をあらわす語尾は Langacker(1991)の叙述のスコープの範囲を指定している、と考えることができる。

叙述のスコープという考え方において、言語上に明示的に示されていることは直接スコープの範疇である。明示的でなくとも、その表現を理解するために必要となるフレーム的知識は、背景に存在しており理解を支えている。たとえば「指」が「手」の部分であることがわかる、つまり「指」の叙述のスコープには「手」が含まれるといったような考え方

である。(cf. Langacker 1991: ch.1)

もともと Langacker の認知文法は空間文法と呼ばれ、概念化は視覚的-空間的な認知に拠っていることを前提とし、視覚的空間のモデルによって説明される (cf. Langacker 1999: 205)。(26a,b) に対応する図2 (a) のように Viewer をオンステージ領域に含まないで概念化する場合と図2 (b) のように Viewer をオンステージに含んで概念化される場合がある。

- (26) a. (私には) コップが見える
 b. 私はコップを見る
 c. コップがある

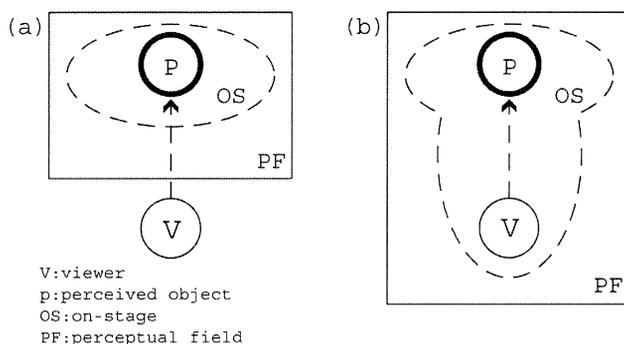


図2

知覚者=概念化者である一人称「私」が Viewer になるような (26b) の表現の場合には、その自己自身まで概念化=言語表現上に表して、知覚者は図2 (b) のようにオンステージに入っている。しかし、(26a) のような場合でも「見える」と表現する主体の存在は言語表現上に表されていない場合でも含意されており、オンステージではないが図のスコープの中には入っている。このスコープについてさらに考えれば、(26c) でも知覚者の存在は背景にあり、このときそこにモノが存在すること、それを〈コップである〉と認識していることまでを背景に解釈できる。(cf. Langacker 2002)

つまり、知覚の自動詞は、知覚者を直接的な項にとらなくとも (二格で表すこともできるが)、知覚者が背景に存在していることを示す表現であるといえる。

5. 知覚動詞の意味拡張とアスペクト

5.1 視覚での意味の広がり と 自他対応

5.1.1 知覚の意味での自他対応

- (27) 目を凝らしてよく見たのだが、何も見えなかった (=4a) (小出 2006)

「見る」には、ほかの有対他動詞と同様、対象に対して視線を向けている段階から、対象が何であるかわかる（＝知覚する）段階、さらにその変化を見続けるといったような時間的な切り分け方すなわちアスペクトの違いがある。目を向けている段階は継続相的であり、知覚した段階は結果としての完了相である。この結果キャンセル文の容認性は他動詞でヲ格をとる対象物と自動詞のガ格をとる主語が異なるために起こっていると考えられる。

- (28) a. 目を凝らして窓の外を見たが、暗くて何も見えなかった
 b. *窓の外を見たが、窓の外が見えなかった
 c. 外を{*見た/見ようとした}がドアが開かず(何も){見え/見られ}なかった
- (29) a. *少年は目をつむってボールを見た
 b. ?この少年には目をつむったままボールが見える

すなわち(28a)の文では、「見る」のヲ格をとる対象の名詞と「見える」でガ格をとる名詞が本当に一致しているのかが成立の要因になる。つまり、(28b)で示すように、「〈場所〉を見て〈場所〉が見えない」は成立しないし、「〈場所〉を見る」は「〈場所〉として見ることができる」ことがまず必要である。その先で、(28a)のようにその〈場所〉に〈情報(知覚の対象)〉があるかないかが問題になるとき、つまり環境に情報がなかった場合のみ「見える」の否定「何も見えない」が用いられる。(29c)のように知覚者側が環境へのアクセスができなかったときは、「見(ら)れない」あるいは「見ることができない」が用いられる。また、「見る」ためには目を開けている必要もあり、(29b)のような文が成立するのは少年の能力に依存しているとき、つまり彼が超能力少年だというようなときだけである。

このように「見る」と「見える」の関係は、当たり前だが他動詞か自動詞かということに尽き、(30)に示すように意志性を持った主体が何かを見ることはできて見えるようにすることはできない。

- (30) a. 左を見て!
 b. *左が見えて!
 c. 窓の外が見えるようにして!

さらにいうなら「見る」ことは他者からも見えるという意味で客観的行為となり、(30a)のように他者から命令されうるが、(30b)「見える」ことは対象を共有することでしか、客観性を保てないという意味でも主観的な表現であるが、(30c)のように「見える状態にする」ことはできる。

- (31) a. 星を{じっくり/???はっきり/???きれいに}見る
 b. 星が{?じっくり/はっきり/きれいに}見える

行為の様態を修飾する副詞「じっくり」は他動詞で、対象の様態を修飾する副詞「はっきり、きれいに」は自動詞で容認性が高い。つまり、他動詞では知覚すること自体が表現の中心であるのに対し、自動詞では対象のありようが表現の中心となっている。つまり当然ながら、他動詞は主体が対象に何かしていること（ここでは知覚という行為）が中心であり、自動詞はモノがどのように「ある」のか（ここでは知覚されること）が中心である。

- (32) a. {今日/山の上から} は北斗星が {はっきり/きれいに/たくさん} 見える
 b. 金星はほかの星より {はっきり/くっきり/きれいに} 見える
 c. 星は日が暮れて夜になるとはっきり見えるようになる

時間や場所などのセッティングとアスペクトを考えると、(32a) のように特定の場所、時間を指定することもできるし、(32b,c) 特定の場所・時間でなく、いつもどうであるかも示すことができる。

- (33) a. * (自分の) 目を見る / 自分の目を見ることはできない
 b. 目が見える
 (34) a. 目が見える
 b. 鷺の目は遠くまで (ものが) よく見える
 b. この {めがね/双眼鏡} は遠くまで (ものが) よく見える

また、(33) のように「目が見える」に対応する「目を見る」はない。(他者の目や鏡に映った自分の目を見ることはできる) これは (34) で示される〈可能〉の意味に近い。

5.1.2 意味拡張と自他対応

田中(1996,2002)、高嶋(2007)など視覚動詞「見る」の意味構造は、知覚の意味を中心に、メタファー的拡張とメトニミー的拡張にわけられる。田中(1996)は、認知言語学の観点からの「みる」の語義の分析から次のような多義のネットワーク構造を描いている。

- (35) a. コップをみる 〈基本義〉
 b. 庭のほうをみる 〈-認知〉
 c. 書類をみる 〈+理解・判断〉
 d. 先生が答案をみる 〈+処理〉
 e. ピアノの音をみる 〈他の知覚〉
 f. 痛い目をみる 〈経験〉

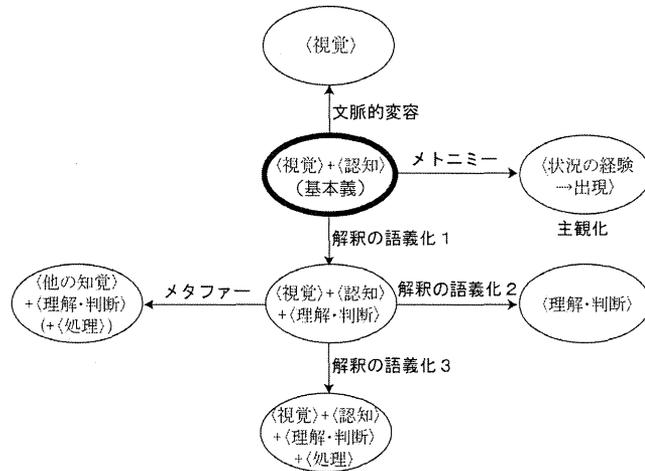


図3 田中 (1996)

メタファー的な拡張は、ヲ格をとる名詞で示される対象物が視覚の対象物から抽象概念や心的なものになる拡張であり、ほかの感覚モダリティでの知覚も、心的操作（概念的検討や判断）になっている。

- (36) a. 検査結果に (=で) 病状の進行具合を見る (〈視知覚+〉 検討)
 a'. 検査から病状の進行具合がどうかしっかり見た
 b. 検査結果に (≠で) 病状の悪化を見る (〈視知覚+〉 判断)
 b'. 病状の悪化をはっきり見た
- (37) a. 検査結果 {に/から} {病状の進行具合/病状が進行したこと} が見える
 a'. 検査結果から病状の進行の度合いがどのようなものであるか {?見えます/見られます}
 b. 検査結果 {に/から} 病状の悪化が見える
- (38) a. 検査結果を見ると、病状が進行していることが見えます
 b. 検査結果から病状の進行具合をみると、病状の悪化が見える
 (=検査結果から病状の悪化がわかる)

この心的操作の意味の自他対応におけるアスペクトについて考えると、〈検討〉の意味というのは、活動的な継続相のものであり、〈判断〉の意味は到達相のものである。自動詞と対応関係がほとんど明白なのは (36b) と (37b) の〈判断〉の意味で、(37a) でも知覚の対象が (36a) と同じにもかかわらず、〈判断〉の意味が解釈される。

さらに次の例文は視覚的情報からそうでない感覚モダリティの情報へ拡張している例である。

- (39) a. {先生/生徒}が答案を見る (視知覚+) 評価(判断)+対処 / 視知覚のみ
 b. {調律師/子供}がピアノをみる (知覚+検討・判断+ (対処) / 視知覚のみ)
 c. {子供/入院患者}を看る (知覚+場に応じた検討、判断～対処)
 d. {医者/看護師/子供}が四人の患者をみた

ここで着目したいのは、情報を得たあとの〈対処〉までメトニミー的に意味は拡張するということである。これが、具体的な要素すなわち、視覚での知覚という具体性が希薄化し、主観化した意味拡張の結果の意味といえる。このとき、主語になる知覚者が〈対処〉できる人間だと主観的判断を加え、さらに適切な対処をとるという意味になる。ゆえに(39a)先生ならば採点を行ったことが含意されるが、生徒だとただ眺めるだけ、(39d)医者ならば治療すること、看護師ならば世話をすること、子供ならばただ目撃したことのみの意味が解釈されるのがふつうである。

さて、このような〈対処〉まで含意するような表現の自他対応はどのようになるかという、主体の能力が関わる場合「評価や対処ができるかできないか」という可能の意味では「が見える」は使えず、知覚者を項にとれる可能の「ヲ見(ら)れる」が使われる。

- (40) a. {先生/生徒}が答案をみる (=39a)
 b. 生徒には国語の記述の答案 {をみれない/*がみえない}
 (41) a. {占い師/素人}が手相をみる (視知覚+評価(主観的判断))
 b. 素人には手相は {見れない/*見えない}
 c. この手相には不幸な未来が {見られる/見える}

表現のオンステージ領域内に知覚者の能力の有無を読み込まなければならない(41a,b)のような場合、知覚者がステージ上に乗れない自動詞表現は容認されないということである。逆に、(41c)のように、対象物に関する事実を述べる場合は、自動詞も容認される。

- (42) a. 総理の発言に日本の {φ/残念な} 未来 {が見える/を見る}
 b. 彼の発言に将来性を見たので、支持を決めた
 c. 彼の発言に日本の未来が見えたので、支持を決めた

また、「…に～を見る」と「～が見える」は対応関係にある。これはどちらも完了的な〈概念的判断/評価〉の意味であり、継続相の〈概念的検討〉の意味はない。

このように、意味拡張の観点から鑑みると、自動詞はなにか知覚した際に主観的内容〈概念的判断/評価〉ができることを示し、知覚行為の様態や、知覚者の行動のスキプトに乗るような意味拡張は持たない。逆に見れば、他動詞は、知覚者の行動の様態や能力に依存した行動のスキプトからも意味拡張しているといえる。

5.2 聴覚での意味の広がり と 自他対応

5.2.1 知覚の意味での自他対応

まず他動詞「聞く」の基本的な意味は聴覚で情報を捉えることである。このとき対象は聴覚上の情報か、情報が存在する対象すなわち CD などの情報ソース、スピーカーなどの音の発生源ということになる。

- (43) a. {音/物音/話/*窓の外/*左/*校長先生/音楽/CD/スピーカー} を聞く
 b. {音/物音/話/*窓の外/*左/*校長先生/音楽/CD/*スピーカー} が聞こえる

聴覚の場合、視覚と違って〈場所〉をとれないのは、知覚刺激である音の認識をして初めて「聞く」ということが成立するからである。(44) は注意して聞くという文脈情報を入れて初めて継続相の行為の過程に着目でき、結果をキャンセルすることができた文だといえよう。

- (44) 耳を澄ましてよく聞いたのだが、何も聞こえなかった (=4b) (小出 2006)
 (45) ?CD を聞いたが、聞こえなかった

もちろん文脈によっては (45) が「CD をかける」という意味でも使えなくはないが、そのような用例はほとんど見受けられない。

- (46) a. {美空ひばり/ハイフェッツ/枝雀} {を聞く/が聞こえる}
 b. 体育館から {ビートルズ (の曲) /*校長先生/校長先生の話} が聞こえた
 c. A: 「文化祭で田中の歌を聞いたけど、なかなかよかったよ」
 B: 「僕は海老原さんを聞いた、うまかった」

(46) のように音楽や落語などに関わる固有名詞ならばメトニミー的に解釈が可能であるものがある。しかし話者であり、それが何である (誰から発せられた) かを知っているからといって「校長先生」のような人は対象にとれない。これは慣習的に成り立っているようでもあるが、(46c) のような文脈によっては特別な固有名でなくとも可能になる。

- (47) a. {*耳/スピーカー} を聞く
 b. 音が聞こえる
 c. {耳/*スピーカー} が聞こえる
 (48) a. 小さい音まで聞こえる
 b. 犬は人間に比べて小さい音 {が聞こえる/を聞くことができる/を聞きとれる}
 c. {耳/*スピーカー/イヤフォン/補聴器} がちゃんと聞こえる

(47) のようにヲ格の対象には音を発するものは他動詞でしかとれず、自動詞では「目」の時と同じように、知覚器官で何かを知覚することが可能であることを示すことができる。

(48b) で示すように、この「聞こえる」は「聞くことができる」に言い換えられる。対象でなく、知覚器官の側にある機器ならば(48c)のように容認される。

- (49) a. 話を聞いている
 b. 話が聞こえている
- (50) a. 彼は {じっくり/中途半端に/ゆっくり/しっかり/??はっきり} 話を聞いた
 b. {*じっくり/中途半端に/??ゆっくり/しっかり/はっきり} 話が聞こえる

(49) は文脈情報によって様々な解釈が可能であろうが、(49a) と (49b) では知覚者の態度や、置かれている状況が全く違うと解釈されよう。(49a) では自分に向かって話をしていいる相手に向かって話を聞いているという状況が想定されるが、(49b) では、自分に向けて話されている状況より、無関係の他人が無関係の人間に向かって無関係なことをしゃべっている状況のほうが解釈されやすい。(50a) と (50b) でとれる修飾語が異なっていることからこれも示すことができる。

5.2.2 意味拡張と自他対応

靑山・深田(2003)で国広(1994,1997)が提唱する現象素⁶を用いた多義構造の例として「きく」が挙げられているが、他動詞「きく」には主に三つの意味がある。

- (51) a. A君はわからないところを先生にきいた。
 b. 生徒たちは熱心に先生の話聞きいている。
 c. この問題について専門家に話をきいた。(靑山・深田 2003: 180)

このときの、現象素は〈相手に情報・答えなどを求めて、(相手の話などを)聴覚で捉える〉であり、出来事の全体(50c)と部分(前半51a;後半51b)の関係に基づくメトニミーであると捉えることができる。

これ以外に、「きく」の意味は次のように「言うことをきく」(服従する)の意味がある。

- (52) a. 社長の命令をきいた。
 b. {子供/親}の言うことをいちいちきいてはられない

時間軸の観点からこれを捉えるなら、これは知覚の「聞く」を中心に、まず、知覚の「聞く」こと、つまり聴覚的情報を得ることを目的とした「聞く」前の「訊く」(質問する)がある。また、聞いたことに対する対処、誰かの指示を「聞いた」ためにしなければいけな

いことを知り、それに従うという「聞いた」あとの「言うことをきく」(服従する)がある。これは時間的な隣接性に基づくメトニミーであるとも考えられる。対処できる能力があつて、情報を得たことによる〈対処〉の意味は、(39)の「みる」と同じスクリプトに基づいた意味拡張であるといえよう。

では、意味拡張後の他動詞と自動詞の対応関係はどのようになるかということ、ほとんど対応していない。

- (53) a. 先生にわからない点を聞いた
 ≠b. 先生からわからない点が聞こえた
- (54) 話を聞いているようで {聞いていない/*聞こえていない}

このように話や噂など人間の発する言語情報に関しては自動詞と他動詞で分布が異なる。更に次の例を示す。

- (55) a. ??噂が聞こえて、人が集まってきた
 b. 噂を {聞いて/聞きつけて} 人が集まってきた
- (56) a. 噂はかねがね {聞いて/聞き及んで} 参りました
 b. 噂はかねがね聞こえて参りました
- (57) a. あなたの話は彼から常々 {聞いて/??聞こえて/聞かされて} います
 b. あなたの話は常々 {*聞こえて/聞いて} います

噂など「話の内容」の場合は、自動詞が許容されるが、誰かから「聞く」という行為が喚起される場合は、やはり自動詞との対応がない。

- (58) a. ただの挨拶も、嫌味に聞こえる
 b. *ただの挨拶を嫌味に聞いてしまう

また、「…ガ～に聞こえる」は主観的判断を伴った情報の受容を示すことができる。これは他動詞「…ヲ～に聞く」とは対応がなく、主観的判断の意味をとることは他動詞では不可能である。このような構文で、自動詞「聞こえる」のみが〈主観的判断〉の意味を持っているといえることができる。

5.3 嗅覚での意味の広がり と 自他対応

5.3.1 知覚の意味での自他対応

まず他動詞「嗅ぐ」の基本的な意味は嗅覚で情報を捉えることである。このとき、対象は、物理的物体や場所、さらに、においが許容される。

- (59) a. {窓の外/部屋の中/バラ、料理、ゴミ/|におい} を嗅ぐ
 b. {窓の外/部屋の中/バラ、料理、ゴミ/*|におい} を嗅いだが、何もにおいがしなかった

このとき、「においを嗅ぐ」だけが完了の意味を持っていると考えられる。しかしこれも対象が明らかになっている場合は、「嗅ぐ」という動作〈鼻を近づけて息を吸う〉を表す継続相的な意味になっているといえよう。

- (60) a. {窓の外/部屋の中/バラ/ゴミ} のにおいを嗅いだが、何も匂いがしなかった
 b. どこからともなく {いい/ゴミの/バラの} 匂いを嗅いだ { ϕ /*が、何の匂いもしなかった}

(60b)のように、その継続相的な動作が伴わないような場合のみ、完了相の意味を持ち、自動詞によるキャンセルができなくなる。ゆえに、「嗅ぐ」は前の二つと違って、完了的な意味と、継続相的な意味を同時に持つことがないと考えられる。

5.3.2 意味拡張と自他対応

「嗅ぐ」にはたいした拡張が見られないが、アスペクト指定するような後項がつく複合動詞では、嗅覚以外の情報を探索し、情報を得るといような意味がある。

- (61) a. 梅のにおいを {嗅いだ/??嗅ぎつけた}
 b. 好物のあんこのにおいを {嗅いで/嗅ぎつけて} 店を発見した
 c. 有名女優のスキャンダルを {*嗅いだ/嗅ぎつけた}

(61a)のように、ただそこにあるのではなく、探していた見つけにくい情報を得るような場合に、「嗅ぎつける」は使える。

嗅覚情報の場合は、対象を刺激である「におい」に限定していて、刺激の発生源つまり場所を対象にはとれない。つまり、「におい」以外の情報を入手したという到達相の解釈がない。しかし「嗅ぎ取る」や「嗅ぎつける」の場合はそうではなく、〈その場所が刺激の発生源である〉ということを経験したという意味を持っていることがわかる。(62)は嗅覚情報に関することだが、(62b)になるとすでに「におい」ではなく、〈においがあることを認識している〉という意味で概念的意味に拡張しているため、「嗅ぐ」では不十分になることがわかる。(63)は対象も概念的であり、このようなとき到達相をもたない「嗅ぐ」は意味拡張せず、使えない。

- (62) a. 蜜 {φ/のにおい} を {嗅いだ/嗅ぎ取った} ミツバチが群がってやってきた
- b. 蜜のありかを {??嗅いだ/嗅ぎ取った} ミツバチが群がってやってきた
- (63) 利権のありかを {*嗅いだ/嗅ぎ取った/嗅ぎつけた} マスコミが群がって取材にやってきた
- (64) a. あの男がおうな
- b. この事件ではあの男がどうもくさい

また、(64) のように、「嗅ぐ」に対応する自動詞「におう」や形容詞「くさい」も同じ基盤で拡張しているといえる。

6. 知覚動詞の多義の構造化：アスペクトの観点から

アスペクトを決定する時間軸を横に、主観性の度合いを縦にとると、視覚、聴覚、嗅覚の他動詞と自動詞の多義構造マップは次のようになる。縦軸は、客観から主観の方へ (a) 行為を他者と共有している、(b) 対象を他者と共有している、(c) 主観的・心内活動とした。(a) は行為の様態を示す意味、(b) が〈知覚〉の完了までを示す意味で、(c) は各々の感覚モダリティごとの情報でなく、〈概念的判断〉へ意味拡張しているときの意味である。

この図の横軸は他動詞のアスペクトを中心に捉えているため、自動詞のアスペクトの問題については深入りせず、他動詞の完了時の意味と対応があるという理由で配置している。

知覚したとき、〈モノを「～として」認識する〉ことはすなわち〈判断〉することであるので、知覚の背景に〈判断〉が広がっている。ただし、メトニミ的拡張は、この次元にうまくのらないので破線で示し、〈可能〉は時間に関係ない環境情報だが、便宜的に示した。〈可能〉は情報があるとき、ほかの背景に存在するが、そのことについての図示は控えた。

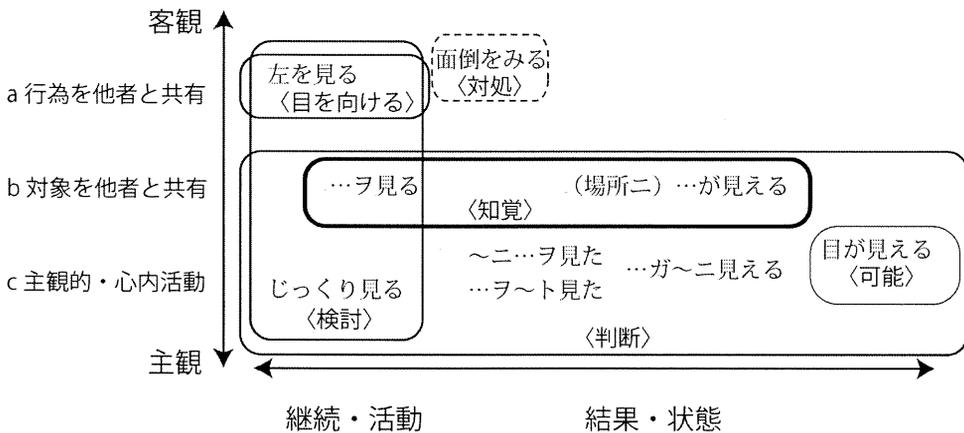


図4 「見る/見える」の多義構造

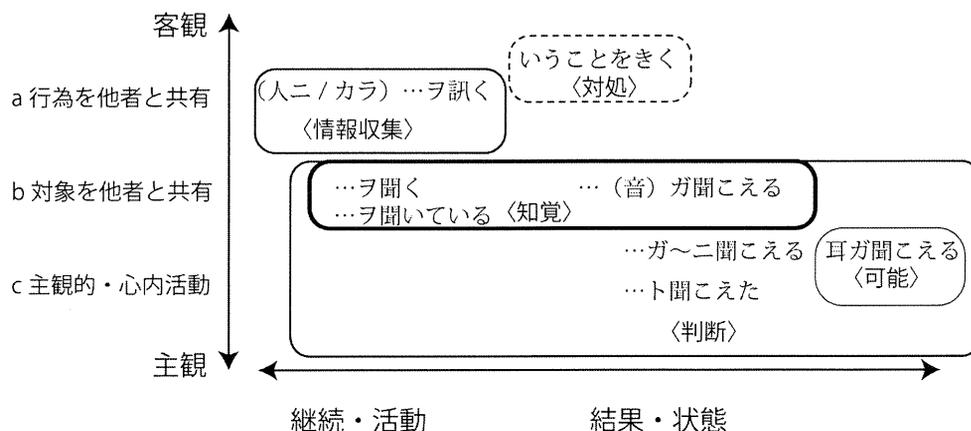


図5 「聞く/聞こえる」の多義構造

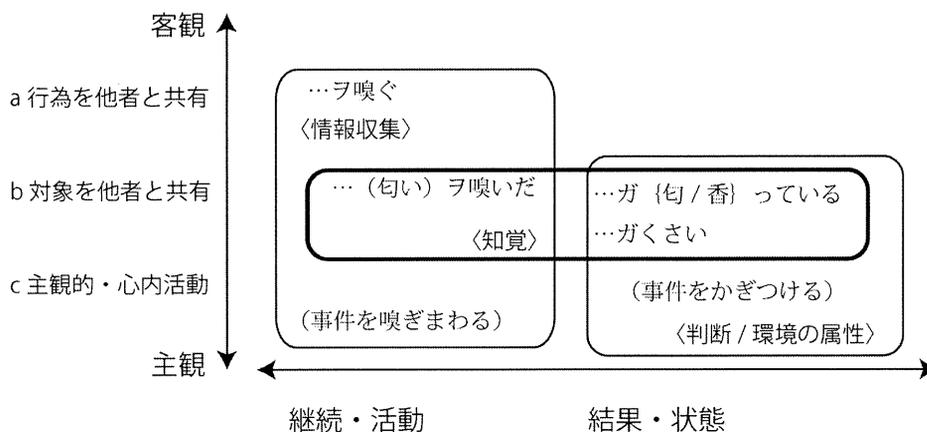


図6 「嗅ぐ」とその周辺の多義構造

このように、主観的判断の意味では自動詞が使われる。主観的な判断、評価を行う主体は常に一人称で、これをあえて「私は〜と見た」とか「私に(は)そう聞こえた」といわなくとも、誰の判断かわかる。しかし、誰の判断でもなく、自発的あるいは、環境情報として自ずからそうある、といったニュアンスも汲み取れる。これに伝統的にいわれてきた考察を加えるのならば、「わたしが判断した」という言い方よりも「こう判断される」という言い回し、つまり「スル的」より「ナル的」(cf. 池上1981)が好まれているといえる。

知覚の自動詞のアスペクトは「えせアスペクト」などとよばれ(cf. 奥田1977)、「完成相形式をとりながら継続相のアスペクトの意味を持っているから特殊だというのではなくて、アスペクトのうえで完成相の基本的な意味も継続相の基本的な意味も持っていない」(高橋

1984) との指摘がある。知覚者が叙述のスコープ内にいることを示すが、一方で、知覚者がいれば、知覚される状態にあるという条件付きの対象の存在を示しているともいえる。

ここでは紙幅の都合上これ以上の言及は避けるが、嗅覚だけでなく視覚や聴覚にも周辺語彙が存在する。たとえば、視覚では「光る、鮮やか、明るい、まぶしい、暗い」聴覚では「音がする、響く、うるさい、静かだ」などそれぞれ挙げられる。これらもこの構造のなかに書き込むことは可能と考えられる。

7. おわりに

7.1 まとめ

本稿では、知覚の他動詞と自動詞の意味拡張について、アスペクトと主観性の違いに着目して分析を行った。自動詞のように、知覚者が動詞の項に入らないと、知覚という活動ではなく、その結果状態としての主観的判断内容にフォーカスが当たり、これを基盤に意味がシフトし、主観的な意味への拡張が起こることを示した。この傾向は、「見る/見える」「聞く/聞こえる」の対だけでなく、「嗅ぐ/匂う」でも起こることも観察された。

視覚と聴覚では、他動詞と自動詞の対応関係があるが、嗅覚ではないのは、「見る」「聞く」が他の有対他動詞と同様、行為の様態自体より、結果を含んだ全体を意味する他動詞であり、一方で「嗅ぐ」は行為の様態をあらわし、知覚の成立の局面を含まない用法が中心的だからであると考えられる。しかし、完了的なアスペクトを指示する後項をつけた複合動詞は、視覚と聴覚の表現と同じように意味拡張することもわかった。また、「見る」では「左を見る」など他者と共有できる行為を示すのに対し「聞く」では、知覚の意味の際、基本的には知覚したことしか示さず、他者のいない知覚は常に「聞こえる」と対応する。以上のことは身体性の反映であるといえる。つまり、目は情報探索のために他者からも見える動作を行うが、耳はもっぱら情報を受容する器官であるということ、日本人の日常生活では嗅覚ではあまり情報を得ようとするのが少なく、突然くさいにおいがすることと、何か匂うか意識的に嗅ごうとすることに隔たりがあることなどを反映しているのだといえる。

意味拡張に当たっては、他動詞の到達相的な側面での拡張と、自動詞が対応関係にあるが、自動詞のほうがより主観的判断・評価の意味に拡張を持つことがある。これは特に聴覚では顕著である。他動詞は、主観的な意味を持つとはいえ、判断・評価した主体が叙述のスコープに直接入り込むため、主体の判断であるといった意味合いが強いが、自動詞の場合は、知覚者が直接スコープには入らないため、より対象に関する記述であるといった側面が強い。他動詞と自動詞の意味の違いは、結局この主体の存在がどこまで解釈されるかにあり、「聞く」では、「話を聞く」など相手がいる場合とそうでない場合でふるまいがちがうことも観察された。これもまた、感覚モダリティごとの役割の違いを反映しているといえよう。

以上のように、感覚モダリティごとの身体性と情報の特性を反映したアスペクトに基づ

く自他対応と意味拡張が観察された。

7.2 さらに考察と今後の課題

7.2.1 多義構造について

多義構造は、さまざまな観点から描くことができる。ここで示した、主観性とアスペクトの関係からの整理もまた、ひとつのやり方である。Langacker のネットワークモデルや、国広-靱山の現象素を中心としたモデルは汎用性の高い妥当なモデルであるといえよう。しかし、本稿で提案したような、ある意味特殊なモデル化で行っていることは、その実は、様々な要素のある意味のマトリックスの中で、着目したい観点を軸に整理し直したのである。実際の意味の構造というのは、二次元や三次元で描けるものではなく、それ以上の次元に渡って展開するマトリックスを持っている。ゆえに、多義の構造について考えるときは、観察したい事象によって、取捨選択することが求められる。2.2.2 でとりあげた高嶋(2008a)ではメタファー(主観/概念的領域への投射)とメトニミー(行動=イベントのスクリプトにおける時間関係)という二つの軸からの多義構造を描いた。本稿第6節では、また違った観点から多義構造を描いた。もちろん、語の意味が人間の理解できるものであるがゆえに、意味を構成する要素も無限ではない。ゆえに無限に構造があるわけではないと考えるのが妥当であろう。しかしながら、多義の構造について考察するとき、なんのために、どんな観点から整理したのかということについては、常に明示されるべきであろうことを申し添えておきたい。この点からいうなら本稿は、感覚モダリティごとの自他動詞の差を明確にするために、三つの感覚モダリティの特徴をカバーできる次元を選び、記述・構造化を行ったものである。

認知言語学では安易に「ゲシュタルト的」な認知ということを主張してしまいがちだが、言語学の意義を考えるとき、意味理解のための計算モデルを考えようとすることや、認知科学との整合性を図ろうとする試みを疎かにしてはいけぬ。本稿で試みたことは、現象の記述と、それをまとめる妥当な構造を提示することである。

7.2.2 知覚と属性・感覚形容詞

本稿では、遠感覚と呼ばれる視覚と聴覚を中心に、嗅覚の表現までを扱ったが、味覚・触覚の表現は扱えていない。触覚の表現では、自分が他者を「触る」とき、同時に他者が自分に「触る」という両義性が複雑であり、一概に知覚動詞と呼べない性質が多く存在するため、今後の課題として挙げておくにとどめる。また、味覚においては、「味わう」ことは〈知覚〉だけでなく〈楽しむ〉といった活動に属している。さらに「味がする」という知覚対象の属性に関する表現が中心で、「甘い・辛い・しょっぱい」などの形容詞の表現が典型的である。五感の表現を包括的に考察しようと試みる際には、動詞とあわせて知覚対象の属性を示す感覚形容詞も検討していく必要がある。

視覚と触覚どちらを中心に考えるかについては哲学的観点を含め、議論が絶えない。

Langacker のモデルは空間-視覚中心的であるが、一方で認知言語学は「身体性」を唱える。言語表現上ではどのモデルでどのような事態が捉えられるのかについて、今後も追求していきたい。

注

* 本稿は、日本言語学会第 136 回大会（2008 年 6 月 学習院大学）での口頭発表「知覚動詞の他動性とアスペクト—意味拡張と身体性の観点から—」をもとに、大幅な改訂と加筆を行ったものである。発表に際しては、司会の吉村あき子先生（奈良女子大学）、会場の西光義弘先生、松本曜先生（神戸大学）から有益なコメントをいただいた。また、多義構造に関する見解は、言語処理学会（2008 年 3 月）に際して井上優先生（国立国語研究所）にいただいたコメントが元になっている。これらのコメントに対して現段階で十分な回答になっているとは言い難い点も多々あるが、この場を借りてお礼を申し上げたい。もちろん、本稿の不備はすべて筆者の責に帰する。

- 1 ここでは詳細に立ち入らないが、「バラを嗅いでみる」を関西では「バラをにおってみる」という表現が可能で、「におう」を自他同形の動詞として用いることがある。
- 2 小泉（1989）、小出（2006）などで整理されてきたように、五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）をトップダウン的に与えて寄せ集めた動詞を、すべて知覚の動詞ということもできるが、「触る、触れる」は物理的接触の意味のほうが強い。たとえば「写真が鮮やかである」ことを知覚したことを「写真が鮮やかに見えた」ということはできる。しかし、「絹の手触りが柔らかい」という意味で「*絹は柔らかく触る」という表現はできない。「子供がガラスケースを触っている」など、知覚を目的としていてもいなくても使える。また、味覚の表現は、「味わう」という動詞がある以外は、食べ物の属性を表す「甘い、辛い、まずい」など感覚形容詞が大半を占める。
- 3 中右（1994）や出水（2005）などでは、英語の look (at) と see、listen (to) と hear の別に着目し、前者が行為の遂行、後者が行為の成就をそれぞれ別々に語彙化していることが指摘されている。出水は look at が「対象に視線を向けている」という規定値をもち、メトニミー的に see が含意されるが、それぞれの文脈の指定によってその解釈は破棄できるという主張をしている。
- 4 そもそも「メンタル・コンタクト」という用語法には問題がある。「コンタクト」すなわち接触は、物理的接触を基本に考えるとすると、接触する側とされる側という方向性が明白にならないという点で曖昧である。接触している状態というのは、二つの別々の個体が前に離れていて、以後離れることが可能であるという前提を必要とするが、接触のメタファーで知覚を語るのは、曖昧さを解消しない。このため動作主から被動作主への行為の方向になぞらえられる志向性や、情報の「移動」という概念にまつわる方向のようなもので、実際に物理的物体間の接触がないものをメンタル・コンタクトと呼んでいると解釈することとする。

- 5 松本(2004)はTalmy(2000)の虚構移動の観点から、視覚表現には「目を注ぐ、視線が届く」など「視線を対象へ放射する」移動があることを指摘している。さらに「目に飛び込んでくる」など映像の移動があることも指摘される。
- 6 現象素とは、「語の用法と結びついた、外界の現象・出来事・もの・動作など、感覚で捉えることができるもので、言語外に人間の認知の対象として認められるもので、多義はこの現象素の認知の仕方の違いが主な原因で生じる」(国広1997)

参考文献

- Austin, John L. 1964. *Sense and Sensibilia*. Oxford: Oxford University Press.
- Bolinger Dwight L. 1974. Concept and Percept: Two Infinitive Constructions and Their Vicissitudes. 日本音声学会記念論文集刊行委員会(編)『音声学世界論文集: 大西雅雄博士喜寿記念』65-91. 東京: 日本音声学会.
- Croft, William. 1993. Case Marking and the Semantics of Mental Verbs. In James Pustejovsky (ed.), *Semantics and the Lexicon*, 55-72. Dordrecht: Kluwer Academic Press.
- 出水孝典. 2005. 「look at と see, watch」『英語語法文法研究』12: 141-155. 英語語法文法学会.
- Fillmore, Charles J. 1968. The case for case. In Bach, E. and Harms, R. (eds.), *Universals in Linguistic Theory*, 1-88. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Grady, Joseph. 2005. Primary metaphors as inputs to conceptual integration. *Journal of Pragmatics*, 37: 1595-1614.
- 早津恵美子. 1989. 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に—」『言語研究』95: 231-256.
- 姫野昌子. 1999. 『複合動詞の構造と意味用法』東京: ひつじ書房.
- Hopper, Paul J. and Sandra Thompson. 1980. Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56: 251-299.
- Ibarretxe-Antuñano, Iraide. 2008. Vision metaphors for the intellect: Are they really cross-linguistic? *Journal of the Association of Anglo-American Studies*, 30(1): 15-33.
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』東京: 大修館書店.
- Johnson, Christopher. 1999. Metaphor vs. conflation in the acquisition of polysemy: the case of *see*. In Masako K. Hiraga, Chris Sinha and Sherman Wilcox (eds.), *Cultural, Psychological and Typological Issues in Cognitive Linguistics*, 155-169. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 影山太郎(編) 2001. 『日英対照 動詞の意味と構文』東京: 大修館書店.
- 金田一春彦. 1950. 「国語動詞の一分類」, 金田一春彦(編) 1976. 『日本語動詞のアスペク

- ト』7-26. 東京: むぎ書房.
- 小泉保. 1989. 「五感の動詞 (特集・五感の言語学)」『言語』18(11): 76-82.
- 小出慶一. 2006. 「知覚動詞の語彙構造について」『群馬県立女子大学国文学研究』25: 1-16. 群馬県立女子大学国語国文学会.
- 国広哲弥. 1994. 「認知的多議論—現象素の提唱—」『言語研究』106: 22-44.
- 国広哲弥. 1997. 『理想の国語辞典』東京: 大修館書店.
- Lakoff, George. 1993. The Metaphor System and Its Role in Grammar. *Papers from the 29th Regional Meeting of Chicago Linguistic Society*: 217-241. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Concept, Image and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2002[1993]. Deixis and Subjectivity. In Frank Brisard (ed.), *Grounding: The Epistemic Footing of Deixis and Reference*, 1-28. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Leech, Geoffrey N. 1971. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- 松原健二. 2001. 「感覚表現の認知言語学的考察—知覚動詞の用例分析を中心として—」『松商短大論叢』50: 207-227. 松商学園短期大学.
- 松本曜. 1998. 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114: 37-83.
- 松本曜. 2004. 「日本語の視覚表現における虚構移動」『日本語文法』4(1): 111-128.
- 鷲尾龍一・三原健一. 1997. 『ヴォイスとアスペクト』東京: 研究社出版.
- 宮島達夫. 1972. 『動詞の意味用法の記述的研究 (国立国語研究所報告 43)』東京: 秀英出版.
- 初山洋介・深田智. 2003. 「多義性」, 松本曜 (編)『認知意味論 (シリーズ認知言語学入門 第3巻)』135-186. 東京: 大修館書店.
- 森田良行. 1977. 『基礎日本語—意味と使い方』東京: 角川書店.
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』東京: 大修館書店.
- 西尾寅弥. 1954. 「動詞の派生について—自他对立の型による—」『国語学』17.
- 奥田靖雄. 1977. 「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『国語国文』8. 宮城教育大学. (奥田靖雄. 1985. 『ことばの研究・序説』85-104. むぎ書房.)
- 佐藤琢三. 2000. 「動詞の自他の構造と意味」筑波大学 博士論文.
- 佐藤琢三. 2005. 『自動詞文と他動詞文の意味論』東京: 笠間書院.

- Sweetser, Eve E. 1986. Polysemy vs. Abstraction: Mutually Exclusive or Complementary? *Proceedings of the Twelfth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 528-538
Berkeley: Berkeley Linguistics Society.
- Sweetser Eve E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 高橋太郎. 1984. 『現代日本語のアスペクトとテンス (国立国語研究所報告 82)』東京: 秀英出版.
- 高嶋由布子. 2007. 「知覚動詞の認知言語学的研究: 感覚モダリティにおける行動的側面と身体的制約の観点から」, 京都大学人間・環境学研究所 修士論文.
- 高嶋由布子. 2008a. 「知覚表現における態度の二面性の認知言語学的考察—「見る」「聞く」の統語と意味拡張を中心に—」 *Proceedings of the Kansai Linguistic Society* 28: 294-304, 関西言語学会.
- 高嶋由布子. 2008b. 「前項が多義的な複合動詞の生産性—知覚の複合動詞の分析による試論」『言語処理学会第14回年次大会発表論文集』849-852. 言語処理学会
- 高嶋由布子. 2008c. 「五感の動詞の意味拡張—知覚者の意味役割の二重性とメタファーの観点から」, 児玉一宏・小山哲春(編)『言葉と認知のメカニズム—山梨正明教授還暦記念論文集—』145-157. 東京: ひつじ書房.
- 高嶋由布子. 2008d. 「知覚の複合動詞の分布に現れる知覚動詞の身体性」『日本語用論学会大会発表論文集』3: 379-382. 日本語用論学会.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics: Volume 1 Concept Structuring Systems*. Massachusetts: MIT Press.
- 田中聡子. 1996. 「動詞「みる」の多義構造」『言語研究』110: 120-142.
- 田中聡子. 2002. 「視覚表現に見る視覚から高次認識への連続性」『言語文化論集』XXIII(2): 155-170. 大阪大学.
- 谷口一美. 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』東京: ひつじ書房.
- 寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』東京: くろしお出版.
- 角田太作. 1991. 『世界の言語と日本語』東京: くろしお出版.
- 山梨正明. 1994. 「日常言語の認知格モデル1-12 (連載)」『言語』23(1-12).
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』東京: ひつじ書房.
- 山梨正明. 1998. 「五感と空間認知の言語学—感性から見た言葉と意味」 *Computer Today*, 83: 18-27.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京: くろしお出版.